

ヴィゴツキー（1896～1934）

ロシアの心理学者、教育学者。他にも芸術学者、文学学者、障害学者、哲学者、思想家など多岐にわたって才能を発揮した。『思考と言語』『教育心理学講義』『文化的・歴史的な精神発達の理論』『思春期の心理学』など、多数の論書がある。



近年、心理学・教育学の両面でヴィゴツキー理論への注目が高くなっている。

特に、発達を先導するものとしての教育の重要性を説く「**発達の最近接領域**」の理論は有名である。また、小学校教育の特質な機能は「**自覚性と随意性**」および書きことばの習得である、という論も注目を浴びる。

私たちは、ヴィゴツキーのこれからの論を授業で具現化することを試みながら、「授業で子どもの言語的思考を発達させる授業方法」を研究している。

子どもたちは、ことばを、日常では無自覚的に使っている。これは生活経験の中で獲得してきたことばであり、対象は意識できても意味は意識していない。意味を意識していないということは、その意味を使えないということであり、思考や注意、説明、書くことなどの操作を難しくする。

例えば、「そして」「しかし」「だから」などの接続語の意味と使い方を知っていなければ、やはり適切な表現の文章を書くことは難しいだろう。

ことばを自覚的なものに発達させ、思考や注意、説明、書くことなどの操作を随意的なものにしていく過程を授業のなかで作り出すことが、私たちの研究の主目的である。

（森川拓也）

もっとくわしく知りたい方は・・・

ヴィゴツキー(2001)『思考と言語 新訳版』（新読書社）

ヴィゴツキー(2005)『教育心理学講義』（新読書社）

柴田義松(2006)『ヴィゴツキー入門』（子どもの未来社）

などがあります。